# ある外国につながる子どもへの高校受験支援の事例研究
# ー地域・家庭・学校との連携を目指してー

田口香奈恵（東海大学）

## 1　研究の背景

高校進学 ＝ 進路選択で不可欠なステップ

外国につながる子どもたちの高校進学
→日本人生徒と同じように
進学を目指すことは容易ではない

進路選択に向けて・・・　　乾（2013）
・地域の学習支援教室が補てん
（行政・学校が行き届かない部分）
・学校が地域とともにﾈｯﾄﾜｰｸをつくるべき

## 2　目的

小規模なある地域の学習支援教室での事例
地域支援の立場から・・・

1）進路決定までの過程を明らかにする
2）進路選択を促進させた要因を探る
3）地域・家庭・学校との
連携づくりへの示唆を得る

## 3　方法：研究データ

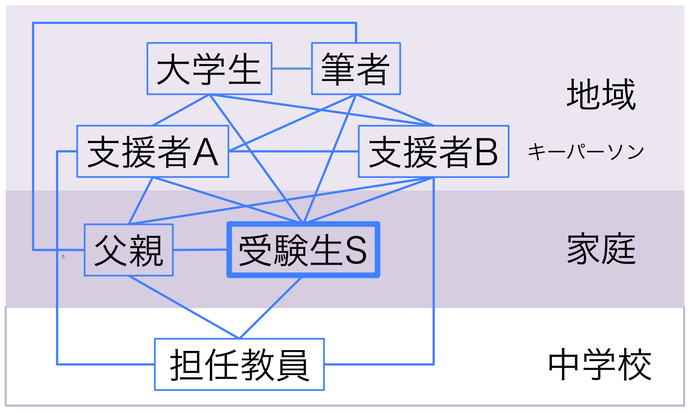
「現場生成型研究※1」　現場に「参加※2」（野津2016）
※１研究者が実践現場に深く参入して内在的に実践に関与する研究
※２現場の一員となって現場成員と共に活動し、現場の改善を目指す

当時の出来事　フィールドノート　支援者とのメール

インタビュー：６名　困難点・解決法・当時の気持ち
地域　：支援者A　支援者B
家庭　：受験生S（南アジアの国がルーツ　長子）
父親（16年前に来日）
中学校：担任教員　学年主任教員

## 4　結果・考察

進路選択に関わった主な人々（地域の立場から）




### 4.1　進路決定に至るまでの主な出来事

| | 日時 | 地域 | | 家庭 | | 中学校 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 支援者A | 支援者B | 受験生S | 父親 | クラス担任の進路指導 |
| 志望校未定期 | 6/22 | 進路についてヒアリング | 公民館で学習支援 | | | １学期 志望校を考える |
| | 8/27 | X高校見学送迎（大学生同行） | | X高校見学 | | 夏休みの宿題 志望校を見学する |
| | 10/10 | 高校進学ガイダンスへの誘い | | ガイダンス参加 | | ２学期半ば 受験方法を考える（併願か単願か） |
| | 10月下旬 | | より静かな環境の別施設で学習支援開始 | | | |
| | 11/27 | | | （母親・弟妹帰国 ～翌年５月） | | |
| 志望校選択期 | 11/28 | | | 三者面談 | | |
| | | 中学校に電話 | | | 支援者Aに電話相談 | 11月下旬 面接シート仕上げ段階 |
| | 12/1 | 中学校訪問① | | | | |
| | 12/6 | | | | 支Aに一時帰国の連絡 | |
| | 12/8-12 | 見学先の高校について相談→父親に相談・連絡 | | | | |
| | 12/9 | 中学校に電話 | | | | |
| | 12/12 | Sと面談 | | | | |
| | 12/14 | | 一時帰国中の宿題を出す | | | |
| | 12/16 | Y高校見学同行（大学生同行） | | Y高校見学 | | |
| | 12/17 | Z高校見学送り（大学生同行） | | Z高校見学 | | |
| | | S・父親と個別に面談 | | | | |
| | 12/19～1/13：父親・子（S）一時帰国 | | | | | |
| 志望校決定期・入試期 | 1/16 | 中学校に電話 | | | 支援者Aに電話相談 | ３学期 志望校決定 最終締切 「特別な受検方法」申請 |
| | 1/18 | 中学校訪問②→志望校決定 | | 志望校を担任に伝える | | |
| | 1/25, 2/1,8 | | 面接シート作成（最終） | 面接練習（３回） | | |
| | 2/3 | | | 志望校変更なし | | |
| | ２月中旬 | | | 入試 | | |
| | ２月下旬 | | 入学手続き（書類の作成、銀行振込など） | | | |

志望校が決まらず面接シートは白紙のまま
見学先の高校が妥当か学校の「感触を探る」
S：父親の迷いに戸惑う
競争率１．２６倍

### 4.2　進路選択を促進させた要因

#### ①Sと支援者の信頼関係の深化

| 支援者Bの態度・変化 | Sの態度・意見 Bと「会えて良かった」 |
|---|---|
| 「普通」に→「より親身になって優しく（励ます・褒める）接するように」なる | 母親の帰国で「寂しい」と本音を漏らす |
| 勉強以外に「関わりたい見ててほしい」というSの気持ちを感じ取る | Bとの会話の中で冗談を言う、茶化す |
| 時には「真剣に怒ってみせる」 | やる気がない「厳しさが良かった」 |
| 「信頼感が増えて行く」実感がある | 支援でのアドバイスが点数の伸びに結びついていく「教え方がすごく上手い」 |
| 学習支援以外のサポート（必要に応じて実行）面接シート作成、面接練習 入学書類作成、銀行振込同行 など →地域は学校と家庭間の「連絡網」になり得るのでは | 両親は日本語の読み書きができないため、Sは自分で書類を作成 |

#### ②父親と支援者との信頼関係構築

＜父親からの評価＞
・日本で仕事が成功
・日本人に対する肯定的な評価
「だます人」「悪い信用」ない
・本教室のサポートは「幸せ」「100%いい」
学習支援、自宅までの送迎、母親の相談に乗るなど

＜父親の悩み・迷い＞
・当初は高校へ行かなくてもいいと思っていた
（日本人の友人からのアドバスを受けて思い直す）
・進路決定までの方法、入試のシステムがわからない
・日本語の読み書きができない
・日本か母国かどちらで子育てをするか（数回往来）
日本：わがままになりやすい、母文化を継承しにくい

支援者Aに頼る→任せる

＜支援者Aの意識＞
父親に自分を「対等に接してくれる人」だと判断してもらえた
「選択肢を広げる」ことができるように複数の「適切な情報を」与える
「情報源としての信頼感」

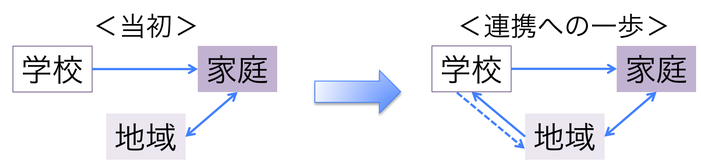
#### ③［父親→支援者→中学校］の繋がり

| | １回目：11月末 | ２回目：１月中旬 |
|---|---|---|
| 父親 | 三者面談後、支援者Aに電話相談 面談結果を報告しようとしたが、内容を正確に伝えられない | 支援者Aに電話相談 「学校の先生と話したが、どの学校がよいかわからない」 |
| 支A | 父親の代わりに中学校訪問を申し出て、父親から承諾を得る | 中学校に電話 |
| 父親 | 支援者Aが中学校に話を聞きに行くことを伝える | |
| 中学校 | 父親の依頼を受け入れる （支援者A、中学校訪問）面談内容が正確に父親に伝わったか不安を感じていた 「非常に助かった」 | （支援者A・B、中学校訪問）SからZ高校を受験したいと聞く 明日、再度Sと話をする 志望校の決定を急ぎたい |
| 結論 | Sの進路問題は「結構厳しい」12月中に受験を考える高校を見学してSの意思を決めさせる | Z高校の受験を決める |

#### ④高校見学への誘いと同行

| 回 | 支援者Aの働きかけ | Sの態度・気持ち |
|---|---|---|
| | 受験生の高校見学は意味がある（過去の支援経験から） Sを繰り返し見学に誘う（アレンジ、同行、送迎）（大学生同行（毎回）：本音を言いやすい） | 「どっかに入れればいい」２高も見学に行くのは面倒 ↓ 「見学は絶対行ったほうがいい」興味のあることなら自然とやる気が出る |
| 1 X高 | 高校見学への「意識が低い」と感じ、父親も誘う | 「なんか、普通だった」「あんま印象に残ってない」受験は「めんどくさかった」 |
| 2 Y高 | 入れるか否かではなく見学先で「自分がキャッチするものを大切にする」「自分で決めることが大切」とSに伝える | 電車通学が楽しそう 勉強が厳しくていい |
| 3 Z高 | | 「Z高が全然良かった」好印象の先輩と「魅力的な」部活に出会う→「即決でした」 ※現在、それと類似した部に所属 |

## 5　地域・家庭・学校の連携づくりへの示唆




**地域が担える役割**
（家庭から学校への連絡は「滅多にない」「それができる親は少ない」）
家庭の悩みを聞き取る　→　学校に伝える
↓
・地域の支援活動の存在を学校に示す機会
・学校が抱える困り感を把握できる機会
・学校の要請に応じる（充実した支援へ）

参考文献：乾美紀（2013）「第10章外国人児童生徒と高校・大学への接続ー３つのNPO・学習支援教室の実践と役割から学ぶー」『多文化教育をデザインする　移民時代のモデル構築』勁草書房 pp.189-208
野津隆志（2016）「現場生成型の異文化間教育学研究の可能性ー現場に根ざし変革を追求する研究とはー」『異文化間教育』43　異文化間教育学会 pp.80-89